

郭店楚墓竹簡『五行』の新研究

岩手大学大学院総合科学研究所総合文化学専攻地域文化リノベーションプログラム

佐々木天珠

本研究は、戦国期の出土資料である郭店楚墓竹簡『五行』について、先行研究を踏まえつつ、近年の出土資料研究の進展の成果を反映させ、郭店楚墓竹簡『五行』の訳注を完成させた上で、先行研究の問題点を解消し、その思想的意義を明らかにすることを目的とする。

郭店楚墓竹簡は一九九三年に発掘され、多くの先行研究があるが、それから三十年間が経ち、出土資料や竹簡に関する研究はさらに加速的に進展している。そのため、現在においてさらに竹簡をについて再検討することは文字学的にも思想史的にも意義があると考える。本研究で郭店楚墓竹簡『五行』訳注を作成するにあたって、いくつかの漢字について新知見を加え、さらにこれを踏まえて郭店楚墓竹簡『五行』の解釈について一部修正した。

先秦期の出土資料は現在とは異なる用字習慣（特に字語関係）を持ったため、この差異が当時のテキストの読解を困難にしている。字語関係とはある語（音と意味）にどの漢字を当てると言う問題である。例を挙げると、『論語』学而第一に「學而時習之、不亦説乎」があり、この中の「説」はここでは「よろこぶ」という意味で使われている。この「兌」「説」「悦」の系統の字は、古くは「兌」字によって「悦（よろこぶ）」「説（はなす）」などの意味を表していた。しかし「説」が作られ「悦（よろこぶ）」「説（はなす）」を表すようになり、さらに漢代には「悦」字が作られ「よろこぶ」意の専字になった。『論語』成立時点では「悦」字がないので「説」が使わ

れている。なお、楚簡では「悦（よろこぶ）」意は「兌」や「弁（敏）」などで表される。現行本『論語』が「悦（よろこぶ）」意の「説」字を使用しているのは、字が改められているのか、あるいは『論語』の成立が新しいからであろう。

このような漢字の字語問題、つまりある語（音と意味）にどの漢字を当てるかという問題、具体的には「悦（よろこぶ）」について「兌」、「説」、「悦」、「敏」のどの字（字形）を選択するかという問題は秦の文字統一の際にも課題でもあった。その秦の文字統一により淘汰された漢字の中から、郭店楚墓竹簡『五行』の文中の意味が不明確な箇所及び「目」や「耳」等の体の器官に係する一群の会意文字を取り上げ、その字形の変遷と妥当な意味について検討した。

また、「弁」字について、先行研究が「恁い慕う」意としていたものを字形の展開を検討することにより「たのしむ」に修正した。これにより、「弁（たのしむ）」が「仁」に至るためのきっかけであり、郭店楚墓竹簡『五行』においては「楽しむ」という姿勢が重視されていることを明らかにした。加えて、他の儒家経典が重視する「仁」が郭店楚墓竹簡『五行』においては最重要徳目ではなく、郭店楚墓竹簡『五行』では道家系の「徳」や「聖」の方が重視されることを明らかにした。また、『詩経』との関連が深い郭店楚墓竹簡『五行』が現行本『詩経』原文をそのまま用いるのではなく、一部修正等を行いつつ引用していることから、郭店楚墓竹簡『五行』の著述時点においては、漢代のような儒教経典としての『詩経』という意識が希薄であることを明らかにした。

【キーワード】 郭店楚墓竹簡、五行、字語関係、楚系文字、秦系文字、詩経